

等々、さまざまな作業を含んでいる。

最近英国で出版された、サンカノゴイ、ヨーロッパチュウヒ、ヒゲガラなどの野鳥の生息地の保全を目的としたヨシ原管理についてのガイドブック (Burgess and Evans, 1989) などは、このような面で参考になる。わが国でも、野鳥だけでなく魚類その他の水産生物や水生昆虫、両生類などの生息環境の保全、水質浄化機能の保全等も考慮に入れ、さらにわが国の風土に即したヨシ群落その他の水辺の植物群落管理の理論や技術を、早急に検討・整理する必要がある。この問題については、また別の機会に詳しく扱う予定である。

#### 引用文献

- Bittmann, E. (1965); "Der biologische Wasserbau an den Bundeswasserstrassen". Bundesanstalt für Gewässerkunde Koblenz, Verlag Eugen Ulmer, Stuttgart, 17~28.
- Burgess, N. D. and C. E. Evans (1989); Management Case Study — The management of reedbed for birds. Reserv. Ecol. Dep., Reserv. Div., RSPB, 78 pp.
- 羽田健三・寺西けさい (1968); 日生態誌, 18, 825~833.
- 建設省河川局 (1990); 多自然型川づくりの推進について. 平成2年11月6日, 治水課長・都市河川室長・防災課長通達.
- Haslam, S.M. (1972); J. Ecol., 60, 585~610.
- Haslam, S.M. (1973); Polsk. Arch. Hydrobiol., 20, 79~100.
- 桜井善雄・渡辺義人・松沢久美子・滝沢ちやき (1986); 日陸水甲信越支報, 11, 15~16.
- 桜井善雄 (1988); 水草研究会報, 33・34, 7~9.
- 桜井善雄・芋木新一郎・上野直也・渡辺義人 (1989); 水草研究会報, 38, 2~5.
- 桜井善雄・芋木新一郎 (1990); 日陸水甲信越支報, 15, 3~4.
- Szczepanska, W. and Szczepanski, A. (1976); Polsk. Arch. Hydrobiol., 23, 233~248.
- 立花吉茂 (1980); びわ湖とその集水域の環境動態 (環境科学研報, B57-R12-4), 79~89.
- von Dalwigk, V., P. Fräsche and S. Kolb (1989); Field Studies for River Bank Protection and Plantation with the Help of Nylon - Structure Mattresses on a Federal Waterway., Research Material of "Bundesanstalt für Gewässerkunde Koblenz", 10 pp.

○漆畑信昭著『柿田川の自然』(そしえて発行、1991年2月、134頁、1,800円)

日本でいちばん有名になった湧水河川、それは静岡県清水町にある長さわずか1.2kmの柿田川であろう。水中には「ミシマバイカモ」はじめ多くの水草が群生していることでも知られる。しかし最近、湧水量の減少や観光化のために問題を抱えている川でもある。今、柿田川の自然を守ろうとトラスト運動が始まっていることをご存じの方もおられるだろう。その柿田川の中やその周辺に生きている野鳥、昆虫、魚類、植物などをカラー写真と文章で紹介するのが本書である。コンパクトな本であるがそれぞれの種の説明がたくみな自然誌となっていて、全然なじみのない生き物のこともたいへん興味深く読むことができる。水草関係では、「フサモ」が間違い(写真はどう見てもホザキノフサモ。フサモが柿田川にあるのかどうかは疑わしい)であるほかは、よくまとまっ

ている。

○刁 正俗『中国水生雑草』(重慶出版社、1990年6月、501頁、3,100円)

中国の水草(多くの湿生植物含む)の図鑑としては、もっとも詳しく、かつ包括的なものである。61科155属437種が取り上げられ、属ごとに種への検索表があり、32枚の図とそれぞれの種に関する記載がある。日本産の水草の分類を調べる上でもたいへん参考になるものだが、種の分け方が細かすぎるとの印象はぬぐえない。例えばヒシ属は16種、ヒルムシロ属は25種といった具合である。これは中国の分類学の発展段階から言えば当然のことなのかも知れない。今後、諸外国の研究との対比を通してもっと整理されていくのであろう。ボリュームの割には廉価な本なので興味のある人は手元に置いておいてもよい本であろう。(角野康郎)